# 不登校の親子関係についての一考察

## ―― 子どもの思春期課題と親の中年期課題との相互作用から ――

林　　郷　子*

# A Study on the Relationship between Parents and Children in Non-attendance at school

## —Interaction between Problems in Adolescence and Problems in Mid-life—

Kyoko Hayashi


### 要　旨

不登校について、思春期の子どもと中年期の親の心理発達的な課題から、とくに分離不安に焦点を当てて検討した。思春期は、親からの心理的自立が中心課題となる時期であり、中年期は、子どもの自立に伴い、養育役割の喪失を体験する時期である。この過程で生じる双方の分離不安が様々な要因により強化されると、親子の分離は困難なものとなり、時には不登校の長期化の一因ともなりうる。本論では、思春期の子どもが不登校となった母親の事例を提示し、この分離不安の絡まり合いについて考察した。その中で、分離に伴う喪失感や寂しさの感情を、特に親の側が、いかに気づき抱えるかということが、依存的な融合状態から抜け出すために重要であることが見いだされた。


## Ⅰ．はじめに

不登校児童・生徒の割合は、ここ30年近くもの間、増加の一途をたどっている。平成14年度からは若干の減少が見られはじめたものの、18年度には再び増加を示した。平成14年度からの減少も、不登校が社会現象になりつつあるのを受けて、別室登校などによる受け入れ体制が整ってきたり、フリースクール等の学外への通級も出席扱いとされるようになってきたりしている中では、「登校」という概念自体が広がってきているとも考えられる。いわゆる「教室に入れない」「学校に行けない」子どもの数が本当に減少したのかどうかについては十分な検討が必要だ。不登校は依然現代の学校教育における大きな問題を呈しているといえる。

不登校の要因としては、様々なものが考えられる。学校生活における要因、家庭内の問題、社会的な風潮等々、である。様々な要因が複雑に絡み合っているため、どれか一つだけを取り上げて不登校の要因とすることはできないが、思春期の心理発達的な課題もその要因の一つとして抜きにしては考えられないだろう。このことは、中学校での不登校が多いこととも関係していると

平成19年９月28日受理　*社会学研究科

思われる。いわゆる“中１ギャップ”といわれる問題など、小学校とのギャップの大きさに付いていけないという側面も否めないが、彼らが必ずしも小学校の時から何らかの課題を呈していたとは限らないことを考えると、やはり、この時期に特有の課題の影響も大きいと思われる。

子どもが思春期といわれる揺らぎの多い発達段階にある頃、多くの親は中年期といわれる時期に達している。中年期は「第二の思春期、あるいは第二の疾風怒濤期」（Jung, 1916）ともいわれ、思春期の次に訪れる、揺らぎの多い時期であるとされている。子どもが学校に行かない、もしくは行きたくないという状態になったとき、そこにどう向き合うかということは親の側の課題でもある。昨年度、不登校の児童・生徒の割合が増加した背景の一つとして、同年度に連続して発生したいじめの問題が挙げられている。そんな辛い思いをしてまで学校に行かなくていいと親の側が判断したためではないかということである。このように、親の態度というものが、子どもを守る場合も含めて、影響を与えている。子どもの側と同様、親の態度についても様々な背景や要因を考えなくてはならないが、ここでも親が抱えている心理発達的な課題を無視はできないと思われる。子どもの“思春期の課題”には、実は親の側の“中年期の課題”が絡まっていることが多いのではないだろうか。

本論では不登校について、この親子双方の心理発達課題を、特に分離不安の観点から検討してみたいと思う。

## Ⅱ．思春期の分離－固体化

Mahlerら（1975）は乳幼児の自律の獲得の過程を、分離－個体化の段階として理論化している。

生後間もない乳児は、母子一体の共生的融合の状態にあるが、しだいに母親と自分は別個の存在であることを認識するようになってくる。そして移動能力が拡大してくると、母親を安全基地としながら、外界と積極的に関わろうとする。しかし外界と関わること、自分と母親が分離していることを意識化することは、同時に様々な不安や心細さを生じさせる。これが分離不安である。そのため、乳幼児は母親を単なる安全基地としてではなく、かけがえのない依存対象として、再度その愛情と承認を強烈に求めるのである。Mahlerは、この時期を再接近期として、分離－固体化過程の中でも特に重視している。この時期に愛情や承認の要求が満たされなかったり、母親の応答性が不適切であったりすると、見捨てられ不安に駆られるなど、再接近期危機と呼ばれるような不安定な状態に陥りやすくなる。再接近期を経て、不安や心細さをなだめ、安心させてくれる母親の機能を自分の内面にとりこむことができる、すなわち母親に対して一貫した愛着を保持する対象恒常性が確立されると、幼児は母親からの分離に耐えられるようになり、安定した母子分離が可能になるのである。

Blos（1962）は、この乳幼児期の分離－固体化理論になぞらえて、青年期とは、子どもが親から心理的に分離し、一個の独立した個体となるプロセスとして、第二の分離－固体化期ととらえた。この青年期の分離－固体化過程にも再接近期が存在する。この再接近期は、青年期の前半、すなわち思春期といわれる時期に相当する。前思春期に、同性の友人を中間対象としつつ少しず

つ母親からの分離が始まるが、第二次性徴に伴い身体の急激な変化、それと関連して心理的な変化が生じる中で、不安定な状態となり、やはり分離不安が生じる。物理的には母親と距離をおくが、心理的には母親に退行を示したり、依存と独立のアンビバレントな感情を示したりする。思春期に入った子どもが、急にべたべたと甘えるようになることがあるが、これも再接近期特有の行動の表れといえるかもしれない。ここで必要な安心感を得ることで、友人を移行対象としつつ、分離に伴う孤独感や悲哀感に耐えられるようになっていき、親との一定の物理的・心理的距離を保った関係が形成されていくのである。

乳幼児期と同様に、青年期の再接近期においても、ここで愛情や承認、依存の要求が満たされないと、不安の方が大きくなり、次なる分離へとスムーズに進むことが困難になると思われる。また、思春期には、これまで積み残してきた課題、とくに乳幼児期における課題が再燃するといわれている。乳幼児期の分離－固体化過程で、再接近期やその後の対象恒常性の確立に課題を残したまま思春期を迎えた子どもほど、第二の再接近期における親への承認欲求が、いわゆる“甘え直し”のような意味も込めて強く出る可能性がある。親の側にとっても、この欲求を満たすのはより大きなエネルギーを要することとなるであろう。さらに、分離へ向かう過程における、本来移行対象となりうる友人との関係の欠如や挫折は、分離不安を支える機能を失うことにつながる。小坂（2005）は思春期の不登校について次のように述べている。「親、特に母親からの情緒的分離の達成と、個人としての社会的アイデンティティの探求が課題となる。この次元では、進路選択など、周囲から求められる社会的課題に対し、親から自立的であろうとして、バランスを崩すことがみられる。学校は、もはや幼児的万能感が許される世界ではなく、現実の自分に直面させられる世界となる。Sullivan（1976）は、そこに『良好なチャムシップ（同性・同年齢の特定の相手との親友関係）』の重要性を主張している。“横の関係”のチャムシップに内在する、無償の親しみとお互いを認め合う体験の欠落は、『第二の分離－固体化』（Blos、1962）を難しくし、『登校』をおびやかす」。

このように、同年代の友人との関係、乳幼児期の課題の積み残し、親の側の応答性などの課題は、相互に絡まり合いながら、思春期の親からの心理的分離を妨げる。それは時には“不登校”という形で現れるのではないだろうか。

## Ⅲ．中年期の自我同一性の問い直し

次に、親の側の発達課題について考えてみたい。

Jung（1916）は、人生を太陽の動きに例えている。正午までを人生の前半とし、その間は太陽が上昇するように成長し、伴侶を得、家庭を持ち、子供を産み育て、仕事を持って社会的足場を得る。しかしその上昇は正午をもってピークに達したあとは、下降へと移り、人生の後半の課題が始まるのだとする。中年期はこの上昇から下降への転回期にあたり、様々な変化が生じる時期とされているのである。

まず、身体的な変化が訪れる。体力の低下や体型の変化など、老化が確実に始まる。生殖力が衰え、女性の場合は閉経という形で生む性としての終わりを迎える。これは思春期とは反対の形

であるが、身体的変化を通しての新しい自己への出会いであり、これまでの自己への別れである。そして必然的に、これらは自分の死への意識につながるものである。それには自分の親との死別ということも関連しているだろう。死が身近なものとして強く意識されることも多いであろうし、また、“親の子ども”としての自分の死を意味することでもある。いずれにしても、人生の有限性というものに、突き当たることになると思われる。

また、社会的にも様々な変化が生じる。例えば職場では、一般的にはそれまでより責任ある役割機能を担うことが増えてくる。しかし一方で、その後も更に責任が増す方向になるのか、あるいは軽減されることになるのかの岐路に立つ時期ともいえる。周囲からどのように評価されてきたかということとも併せて、自分としての職業上の限界感の認識という体験もされるだろう。様々な可能性に開かれていたこれまでに、喪失感とともに別れを告げることが出てくるかもしれない。

そしてもう一つ、家庭における変化がある。先に述べたように、子どもは思春期から青年期へと移行するに伴い、親から心理的に分離し、実際に家族空間から独立するといった事態も生じてくる。このような子どもの変化成長に伴って、親の養育役割は減少・終結を余儀なくされる。この養育役割の減少は、それまでの役割からの解放感とともに、喪失感も生じさせるであろう。これは特に母親において顕著であると思われる。

このように、中年期には様々な喪失感を体験する。喪失感は同時に、これまで選んできた人生に対して「これでよかったのだろうか」「もっと別の生き方があったのではないか」という迷いを生じさせる。青年期に一旦確立したはずの自我同一性に対する問い直しが迫られ、今後の人生後半の生き方への模索を強いられるのである。平木（2006）は中年期を「青年期に続いて、第三の分離固体化、自立の再定義の時期ととらえることができるかもしれない」と述べている。

乳幼児期や青年期がそうであったように、安定した分離－固体化が達成されるためには、もう一度自分を支えてくれる存在の愛情と承認を確認したり、移行対象を得たりする中で、分離に伴う不安や孤立感に耐えうるようになる必要がある。中年期の場合も、第三の分離－固体化を達成する上では、この不安をいかに乗りきるかということが重要になると思われる。「養育役割の終了の時期、家庭にいる女性が取る行動として、しばしばパートや再就職を考えるか、これまで子育て等で遣り残した勉強や趣味を再び学びはじめる、あるいは、宗教に帰依するとか、家庭外の社会的な集団に参加するなどの行動が示されることがある」（乾、2006）が、これは母親役割の喪失感を埋め、紛らせる役割を果たしているといえる。職業を持っている女性にとってもこのことは当てはまるであろう。

ただし、養育役割の喪失という点から見ても、実際には子どもが自立を果たしたあとに親の中年期が始まるわけではない。子どもが分離と再接近を繰り返している最中に、親の側も様々な喪失体験をし、今後の生き方についての模索を始めるのである。晩婚化と長寿化の中で子育てが人生の後半になりつつある現代においては、とくにこの傾向は強くなってきているであろう。そのような中で様々な喪失感を抱えられず、これまでの自分にしがみつこうとする心の動きが起こるとき、子どもを自立させまいとする力が働いて、親子の分離を妨げることになりうる。

また、思春期に乳幼児期の課題が再燃されるように、中年期には思春期に積み残した課題が再

燃するとされる。目の前にいる思春期の子どもは、親の未解決な思春期の課題を刺激することにもなる。親が自分の思春期の分離－固体化の過程に課題を残している場合、子どもとの分離は更に困難なものになるかもしれない。

## Ⅳ．分離の遅延

思春期・青年期の延長がいわれて久しい。この時期の始まりは、第二次性徴のような生物学的な要因によって決定づけられるのに対し、終わりは、職業を持つ、家庭を持つといったような社会的な要因によって決定づけられることが多いからである。高度経済成長時代を経て、高学歴化、晩婚化の進んだ現代は、必然的に思春期・青年期の終わりを長引かせる。最近では、ひきこもりやニートと称されるような、学生を卒業した後も社会に出ていかない人々が注目されるようになってきている。高石（2003）は、「思春期の子どもを『生物学的には大人、でもいまだ社会の内に自らが何者かとして生きていける場をもたない、大人社会にとっての外部者、中間世界の住人』と仮に定義するならば、早熟な場合は９、10歳ごろから、上は30歳前後くらいまでが含まれてくる。近頃は成人して、心身に特別な障害がないにもかかわらず、自室に引きこもり、親から衣食住を与えられて、大人社会への参入を消極的に拒否し続ける一群の人々が問題になっているが、彼らは言ってみれば『終わらない思春期』を生きている人々なのである」と述べている。また、職業は持っていても、親の援助のもとに暮らしている、パラサイトシングルといわれるような人々も増えてきて、青年と成人との境界線はますます曖昧になりつつある。

思春期の延長は、中年期の方も延長されてきていることが影響しているように思われる。中年期から老年期への移行が、例えば子どもの独立の時期や職場の定年退職の時期に左右されることを考えると、子どもの社会への参入が遅くなり、仕事から退く時期が遅くなってきている今日においては、中年期の終わりもまた延長してきているといえる。親が仕事を続け、経済的にも余裕があり、また、核家族化、少子化が進んでいる現代では、子どもが親から分離しなくてはならない必然性が、少なくとも物理的には消失してしまったのである。このような思春期・中年期双方の延長や、親子の分離の物理的な必然性の消失は、当然親・子それぞれの分離－固体化の課題を長引かせる。子どもが親への依存心を断ち切れないだけではなく、親は養育役割にしがみつき子どもを手元に置いておきたいという願望を持ち続けることにもなりうる。「中年になってもまだ元気な母親の、子どもに対する見えない支配力は増し、子どもがきちんと巣立つことができなくなっているようにも見える」（豊田、2006）のである。

不登校の子どもたちの中には、なかなか外界へと関わっていくことができないまま長期化してひきこもりになってくケースもあるが、その背景には、こういった親子双方の課題が絡まり合っている場合もあるのではないだろうか。

## Ⅴ．事例

それでは、事例をもとに、不登校における思春期と中年期の課題の絡まり合いを考えてみたい。

とくに親の側の心の動きを検討するため、母親面接の事例を挙げる。いずれも筆者が関わった事例であるが、プライバシーの保護のため、本質には差し障りのない程度に事実を改変してある。

**1．事例1　Aさん　43歳　専業主婦**

Aは、小6の長男Bの不登校のことで来談した。Bは小さい頃から気の優しい子で、1年ほど前にAの母親が亡くなったときも、Bが親戚の中で一番落ち込んでいるように見えたという。夏休みの終わりに、Bが外から帰ったとき、たまたまAが不在ということがあった。その時、Bは腹痛を起こしてしまったのだが、Aに電話をしてもつながらないということがあった。その翌日から「自分がいない間にお母さんがいなくなるのではないか」「自分を置いていってしまうのではないか」といった不安に襲われ、Aが自分の目の届かないところに行くのを嫌がり、新学期が始まっても学校に行くことを拒むようになった。困ったAが、Bを伴ってカウンセリングに訪れ、母子並行面接を行うこととなった。

Aは「どこにも行かないで」と言うBに対して、「専業主婦はただでさえ家に縛られている。放っておいてもどこにも行かないのに、更に縛ろうとされているような気がする」と腹立たしさを述べた。Aは元々は福祉関係の専門職に就いていたが、Bより2歳上の長女の出産を機に退職していた。「このまま終わってしまうのもどうかと思って」Bが中学に上がったら仕事を再開しようと考えていたが、今のBの状態ではそれも叶わないと溜息混じりに話した。

Aは、なぜBがこんなに自分を頼りにするのかと考える中で、自分の小中学生時代を振り返った。Aの生家は自営業をしていて両親とも忙しかったため、あまり両親を頼らず、自分で何でもやってきたとのことだった。そして、跡継ぎであり、少し体も弱かった兄の方が、大事にされていたように思うと話した。カウンセラーが1年前の実母の死について触れるが、Aはどこか淡泊に受け止めているような印象であった。

一方Bは、友達からの誘いや、担任の熱心な関わりもあって、休み時間に家に電話をして母の在宅を確かめてよいという配慮のもと、ほどなく学校に通い出す。しかし、最初の内は帰宅後や休みの日などは、Aが勝手に外出することを許さなかった。Aは、せめて夫がBと一緒にいてくれればその間自由にしていられるかもしれないが、夫は仕事で多忙で、休日も含めほとんど家にいることはないと、不満げであった。

Bはやがて、放課後も友達と遊んでくるようになり、帰宅時間も遅くなってきた。休み時間に家に電話をしなくてもそれほど気にならないようであった。Aは、長女が中学生になってから友人関係について全くわからなくなってしまったこと、Bも学校に行かなくなる前は、どんどん行動範囲が広がっていて、把握しにくくなってきていたことを話した。Bがまた以前の状態に戻ってきたことに対しては、うれしさと安堵の反面、「何をしているのかわからない」という心配もあるようで、行動範囲を制限するような動きも見られた。「いずれはわからなくなるんだけど」と苦笑されていた。

Bは友達と遊ぶ時間が増えてきたため、Aに「勝手にどこか行かないように」と言うことはあるが、実質的にはAの行動を縛ることは減ってきた。休日などはAが外出すると付いてきたがるが、Aが夫に頼み込んだこともあって夫も時間がとれるときには一緒に外出してくれるようにな

り、夫がBと一緒にいる間にAは自分の用を済ますということができるようになっていった。

**考察**

Aは専門職の仕事を出産を機に退職したあと、主に「母親」としての役割が自己の多くを占めるようになっていたと思われる。それが、子どもが自分から離れて自立していくのを見越して、「自分にはもっとやれることがあるのではないか」「自分はこのままの生き方でいいのか」と、「個」としての生き方について考え始めたのである。それには、実母の死ということも影響していただろう。「娘」としての自己が一つ終わりを告げたこと、また、自分の死ということをそれまでよりも身近に意識したことなどが、「残された人生」の方に目を向けさせるきっかけとなったと思われる。しかし、Aが自らの「個」としての生き方に向き合おうとし始めた頃、Bの方は、むしろ自立に向けて再度Aとの接近を求めていた時期にあったのではないだろうか。Bが接近しようとしていたまさにその時にAは分離しようとしていたわけだから、Bの不安は増大し、非常なしがみつきを呈することになったと思われる。Bのしがみつきは、最初はAにとっては自分の自立を妨害するものでしかなく、非常に迷惑なものであった。子どもの頃「一人でやってきた」Aは、Bにも「一人でやってくれる」子どもであることを期待していたのである。しかしおそらくは、AがBをふりほどこうとすればするほど、Bは不安をかき立てられ、必死にしがみつこうとしたのではないだろうか。

しかしAの方も、長女はすでに自分の手の届かないところに行きつつあり、加えてBも自分から離れて行きつつあったことに、不安や寂しさを覚えていたようであった。このことが、無意識的にBを引き留め、しがみつきを強くさせていた可能性はある。「一人でやってきた」背後には「もっと甘えたかった」という願望があったかもしれない。実母の死によってそれは永久に叶えられないものとなった。そのような中でAの潜在的な依存欲求や愛着対象の矛先が、一気にBに向いたとも考えられる。夫はAのそういった欲求を満たす存在ではなかったことも関係しているであろう。Aは子どもが自分から離れていく不安や寂しさについて、それほど明確な意識化や感情表出を示してはいない。実母の死も、むしろBがAの不安を肩代わりしているように思える。それでもAが面接の中で、“Bについての心配を語る”という安全弁に守られながら自分のことに触れていったことは、潜在的にではあるがAの気づきを促した側面はあると推測される。Bの不安を自分の中にもあるものととらえることで、単にBを邪魔者扱いすることがなくなり、Bも安心して分離に向かっていけたのかもしれない。

また、最終的には夫の果たした役割も大きかったと思われる。BがAを離さなくなったことで、Aは却って夫に頼ることができたといえる。このことは、Bがどんどん友達との結びつきを強くしていったことで生じるAの孤立感を支えるとともに、AのBからの分離を促すはたらきを担ったのではないだろうか。

**2．事例2　クライエント　Cさん　45歳　パート勤務**

Cの長女Dは、弟と妹のいる3人きょうだいの長子として、しっかりした子として育ってきた。小さい頃、下の2人に比べると、身体接触を求めるような甘え方をしてくることが少なかったと

いう。中１になり、運動が苦手なDは、球技大会でたびたびミスをすることが重なり、そのことでクラスメートから非難されるということがあった。悪口を言われたと落ち込んでいたが、やがて特に「死ね」と言われたことをひどく気にしだし、「自分は死んだ方がいいんじゃないか」「私は生きている価値があるのか」と泣くようになった。学校にもほどなく行けなくなった。家では夜、Cと一緒の布団で寝たがったり、お風呂に一緒に入りたがったりするようになった。CはDの不登校はもちろんのこと、突然の甘えに戸惑い、カウンセリングに通うこととなった。

Dはまるで幼児のようにCに甘え、身体接触を求めてきた。ときおり自分を本当に好きかどうかを問うこともあった。Cは“しっかりした長女”の突然の変貌ぶりに戸惑いを覚えながらも、Dの接触を受け容れ、安心するような言葉かけを心がけた。Cはパート勤務で美術関係の仕事に就いていたが、この間、Dのそばにいてあげた方がいいのではないかという思いから、仕事も休みをとった。「どうせたいした仕事ではない」「このままやめてしまってもいい」と話した。

学校の定期テストの時期になり、Cはせめてテストだけでも受けに行ってほしいと、自分が学校まで送迎すること、テスト中は別室で待機しているのでしんどくなったら来てもいいことをDに約束し、半ば無理矢理にDを学校に連れていった。ところが久しぶりに教室に入ったDは、思いの外クラスメートが暖かく迎えてくれたこともあって、テスト終了後も続けて登校するようになったのである。

本来これはCにとっては嬉しい出来事のはずだった。しかしCはDを心配し、授業中に別室で待機するということを続けたのであった。D本人は「もう一人でも大丈夫」と言っているそうなのだが、「強がっているのではないか」と気になるとのことだった。実際、Dは学校で何か嫌なことがあると、Cに訴え学校へ行くのを嫌がることもあったので、そのことがCのDへの心配を断ち切れなくさせていた面もあった。面接の中で「Dの強がり」についてもう少し話してもらうと、C自身も長女として育ってきた中で、本当は寂しかったり悲しかったりすることがあっても、母に甘えてはいけないと思い、我慢してきた、だからDも自分と同じように甘えまいと頑張っているのではないかと思えてしまうのだ、とのことだった。

そうこうしている内に、仕事でCも関わった作品が賞を取り、雑誌に掲載されるということが起こった。そのため注文が増え、仕事に戻ってきてくれないかという依頼が入った。Cは少し迷うが、自分の関わってきた仕事が第三者に認められたということに「ちょっと誇りを感じた」こともあり、学校の別室で待機することをやめ、仕事を再開することを決めた。

Dは、友達といさかいがあったあとなど、時々行き渋ったり、Cに甘えたりすることはあったが、なんとか登校を続けた。

**考察**

小さい頃から甘えることが少なかったというDは、幼少期の愛着の形成や信頼感の確立に若干の課題を残していたのかもしれない。思春期に入り、親からの分離をはじめる時期になって、本来移行対象となるはずの同年代の友人からの拒否と非難は、単に分離を脅かすものとなっただけでなく、幼少期の課題を再燃させ、自己の存在基盤を危うくさせるものになったと思われる。これらのことが、母親への再接近を強化することとなったのであろう。

CはこのDの急な接近に戸惑いつつも、なんとか受け容れようとする。Dもそこである程度の安心感を得たのであろう、Cが無理矢理学校に連れていったあとは、再度友人を移行対象として外界に向かおうと踏み出したのである。ところが、今度はCの方が子どもへのしがみつきを見せる。Cもまた、実母との愛着形成が確固たるものではなかった可能性があり、“甘えることの少ないしっかりした長女”という点でも、Dと似たような子どもであった。このことはCのDへの同一視を引きおこし、DもまたCからの「強がらず甘えたい」という無意識の願望を引き受けさせられ、母娘の密着関係が強まる中で、母子の分離が困難になっていたといえる。Cが「強がって我慢していた」のは自分であると語ることで、自分の感情を自分のものとして引き戻すことができたのではないだろうか。

Cが子どもにしがみつきを見せた背景としては、もう一つ、Cの仕事に対する迷いも考えられる。Cはこれまでずっと続けてきた仕事に対して、「このまま続けていても意味がないのではないか」と虚しさを感じるようになってきていた。仕事に対する限界も感じ、今後どのように進んでいくかという岐路に立たされていたと思われる。子どもの不登校は、仕事を休むいい口実を与え、虚しさを埋めつつ迷いを保留するという役割を果たしていたとも言えるのである。仕事を諦め、子どもにも去られてしまっては、Cは拠り所を失うことになる。たまたま仕事が社会的に認められるという出来事があり、Cは自分の仕事に積極的な意味を見いだすようになっていった。このことも、子どもが分離していくCの寂しさを支えたことになったのではないだろうか。

## Ⅵ.「寂しさ」を抱えること～まとめに変えて

思春期と中年期はそれぞれ、これまでの自分に別れを告げ、新しい自分に出会っていくプロセスを経る時期である。当然そこには様々な次元における喪失体験を伴う。子どもの親からの分離、親の子どもからの分離もその一つである。分離が可能になるには、その前提としてしっかりとした一体体験が必要だ。この一体感を味わった体験が欠如したまま何となく分離したようにある時期をやり過ごしたとしても、再び分離が課題となる時期には、積み残された課題が再燃することになるのである。過去と現在の二重の分離不安を喚起させ、安定した分離を妨げることにつながる。分離不安が自らが対象から離れることに対する不安だけではなく、対象が自ら離れていくことに対する不安でもあることを考えれば、親・子それぞれの課題が絡まり合うことで、この分離と自立のプロセスは、より一層複雑な様相を呈することになる。

事例にも見られたように、親が自分の人生後半の生き方、「親役割」としてではなく「個」としての生き方を模索し始めることは、時に思春期の子どもには支えを必要としているときに親が自分から離れていってしまう体験として受け止められ、不安を生じさせるかもしれない。そこに子どもの乳幼児期の課題が重なると、不安はさらに増大されるだろう。一方、子どもが自立に向かい親からの分離をはじめるとき、親はある種の喪失感を味わうことになる。とくに親自身が自分の親との分離やそれ以前の一体体験に課題を残していたり、中年期に生じる他の様々な喪失感が重なったりすれば、この喪失感はさらに大きな不安感や孤立感につながっていくだろう。そして親子それぞれがこの不安に耐えられず、不安を解消させる方策として、自分から離れていこう

とする対象そのものにしがみつく形をとると、分離とその引き戻しという綱引き状態は、いつまでも終わらなくなり、そこに依存的な融合状態が生じる。長期化している不登校の中には、この綱引き状態に陥っているケースや、綱を引き合うこともやめてもたれあってしまったようなケースが含まれるのではないだろうか。ではこの状態に陥らないためにどのようなことが大切であろうか。

一つには、親の側がこの分離に伴う喪失感や寂しさといった感情を、自覚することであろう。この寂しさが自覚されないと、子どもを無意識的に自分の手元に置こうとする心の動きにつながるおそれがある。このような感情を自分のものとして引き受けることで、子どもを自分とは別の存在として認識し、分離していくことが可能になってくるのではないだろうか。そのためには親はまず自分の課題にしっかりと向き合う必要がある。高石（2003）が「親はまず自らの思春期を振り返り、自分が親からどのように分離したか、あるいはまだ分離し得ていないかを吟味することである」「子別れの喪失に耐えうるためには、親が自分の人生の仕事にしっかり取り組むこと以外にないのではなかろうか」と述べるように、これまでの自分のあり方、そしてこれからのあり方に向き合う中で、寂しさを自分の中にあるものとしてとらえ、抱えることが可能になるのであろう。仮に仕事や夫との関係などでこの喪失感を補うにせよ、それはやはり自分の中にそういった感情があることを引き受けた後に、建設的な意味を持つのではないだろうか。

したがって、ここで心理面接における治療者の大切な機能の一つは、下手をすれば本人も気づかずにいるこの寂しさや喪失感を、いかに汲みとり、いかに一緒に抱えていくかということになるのではないだろうか。

一方、子どもの側は、親の側ほどはっきりした喪失感は、少なくとも意識的には感じていないように見える。岩宮（1997）は、治療の終結について、思春期のクライエントの場合、きっちりとした終結を迎える、というパターンがとれることばかりではないとして、次のように述べている。「それは思春期が、『自立』が大きなテーマになる時期であることとも関係が深いように思う。治療者からの『自立』ということも、とても重大な課題になってくるため、クライエントの中には、その自立に伴う大きな不安を、治療者を自分の方から切ることによって乗り越えようとすることもあるのではないだろうか。その時、治療者は、切り捨てられたような寂しさを感じることになる。しかし、自立に伴う痛みを、そういった形で治療者側が背負うことも、思春期のクライエントとの治療の終結時には必要なのではないかと思う」。このことは子どもの親からの自立についても、いくらか当てはまるように思う。子どもの側の寂しさや喪失感を親が背負うことで、子どもは分離をむしろ自立という肯定的な意味でとらえることが可能になっているのかもしれない。しかし自分の寂しさに加えて子どもの寂しさも背負うのは、親にとっては時に厳しい作業となる。やはり、この寂しさをともに抱え、ともに背負う機能を果たす存在があることが、重要であると思われる。

## 参考文献

Blos,P.（1962）：*On Adolescence-A Psychoanalytic Interpretation*. The Free Press of Glencoe.（野沢栄治訳（1971）：青年期の精神医学．誠信書房.）

平木典子（2006）：中年期と家庭問題．臨床心理学、6(3)、323-327.

乾吉佑（2006）：中年期の諸問題－特集の導入として．臨床心理学 6(3)、293-304.

岩宮恵子（1997）：生きにくい子どもたち．岩波書店.

Jung,CG.（1916）：*Uber die Psychologie des Unbewussten*. GW7.（高橋義孝訳（1977）：無意識の心理．人文書院.）

小坂和子（2005）：思春期の問題と不登校．臨床心理学、5(1)、62-66.

Mahler,M., Pine,F. & Bergman, A.（1975）：*The Psychological Birth of the Human Infant*. Basic Books.（高橋雅士・織田正美・浜畑紀訳（1988）：乳幼児の心理的誕生．黎明書房.）

岡本祐子（2006）：中年の光と影．現代のエスプリ別冊　中年の光と影－うつを生きる－、概説、志文堂

高石恭子（2003）：思春期の親子関係－離れていく子の見送り方．児童心理、57(7)、628-632.

豊田園子（2006）：世代交代と内的変化－子離れや親の死をめぐって．臨床心理学、6(3)、310-316.